

知的障害者のスポーツ活動を支えるボランティアの 参加動機に関する研究

田引俊和

Research on Participation motive of Volunteers who Support Mental Retarded Person's Sports-Activities

Toshikazu Tabiki

要旨: 本稿では知的障害者のスポーツ大会を支えるボランティアに着目して調査を行った。調査項目は、ボランティアへの参加動機、活動に対する満足度、および燃え尽き度である。

はじめ、ボランティアへの参加動機、及び活動したことによる満足度と燃え尽き度について、それぞれの項目を構成する因子を分析し、その上で参加動機と満足度の関係、さらに参加動機と燃え尽き度の関係を明らかにした。

分析の結果、参加動機と満足度、及び燃え尽き度には関係があることが確認された。自己の利益に関係なく参加した人は対人コミュニケーションに対する満足度が高く、組織や他者からの依頼という動機で活動に参加した人はボランティア活動への関心は低く作用していた。同時に、実益に関係なく他者と出会いたい、人の役に立ちたいという動機で参加した人は燃え尽きとの関係が低いことが示された。

Keywords: 知的障害者スポーツ, ボランティア, 参加動機, 満足因子,
燃え尽き因子
mental retarded person's sports, volunteer, participation motive,
satisfaction factor, burning out factor

はじめに

近年、ボランティア活動に対する関心が高まっており、多くの市民が身近な、そして関心のある分野でのボランティア活動に参加している。中でも法人格の有無を問わず福祉サービスを提供する組織やまちづくりのための活動に参加する割合が高く（山内編, 2004）（和田, 2002）、これまでその分野に特に関わりのなかった人たちもボランティアとして参加するようになってきている。

ただ、ボランティアとはいいいながらも、純粋に無償かつ利他的に活動する場合から、他者や所属している組織からの依頼により参加するなど人それぞれ様々な理由でボランティア活動に参加していることが伺える（山内編, 2004）。もちろん、多様な人が比較的自由に参加できることそのものがボランティア組織の長所でもあるわけだが、それを楽観視しては今後のあり方が懸念される（田尾, 2001）。有給の専従職員を置かず実際の活動から事務局の運営までもボランティアでまかなっているような団体ではなおさらではないだろうか。ボランティアが組織の活動を実施していく上で大きな役割を担っているような団体では、積極的で継続的に参加してくれるボランティアの存在は不可欠なものであり、そのための活動内容の充実と継続意欲に関するマネジメントが重要であると考えられる。

本研究では、知的障害者のスポーツ活動を支えるボランティアに参加する人たちの動機や満足度、及び燃え尽き度の関係を明らかにし、ボランティアマネジメントのための基礎資料を得ることを目的に分析を行なった。

研究の方法

1. 調査の対象

本研究では、ボランティアとして知的障害のある人たちのスポーツ活動を支えている人たちを調査対象とした。具体的には、知的障害のある人たちにスポーツトレーニングの機会を提供している「スペシャルオリンピックス日本(SO, 以下SO)」が行なった全国大会に参加したボランティアを対象にした調査である。SOは、「アスリート」と呼ばれる知的障害のある人に日常的にスポーツトレーニングを提供している活動で、その運営のほとんど全てがボランティアによってなされている。ボランティアは活動の存続のために不可欠なものであり、同時に参加するボランティアの交通費や食費など全ての費用は個人負担が原則となっている。

本研究では、2004年2月に長野県で行なわれた「2004第3回スペシャルオリンピックス日本・冬季ナショナルゲーム・長野」に参加したボランティアを対象に、郵送法による質問紙調査を実施した。調査期間は2004年2月26日から3月31日まで、配付数は1200、回収数は466(回収率38.8%)であった。

なお、調査においては山口県立大学の松本耕二氏、仙台大学の仲野隆士氏の協力を得た。

2. 調査内容

本研究では、知的障害者のスポーツ大会を支えるボランティア活動への参加動機、ボランティア活動をしたことによる満足度、および燃え尽き度などの要因群を中心に調査を行った。またこの他にも、年齢、性別、職業などの個人的属性についても回答を得た。

3. 分析方法

ボランティア活動に関して本研究で取り上げる要因についてそれぞれ、参加動機については30項目、満足度については20項目、燃え尽き度については17項目を設定し、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5段階リッカート尺度で測定し、5から1までの得点を与えて数量化した。その上で、因子分析(主成分分析、バリマックス回転)により参加動機に関する因子、満足度に関する因子、および燃え尽き度に関する因子の抽出を行った。

さらに、満足度因子を従属変数、参加動機因子を独立変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行い、ボランティア活動に対する満足度を規定する参加動機を明らかにした。同様に、燃え尽き度因子を従属変数とし、参加動機因子を独立変数とするステップワイズ重回帰分析を行い、ボランティア活動をしたことによる燃え尽き度と参加動機との関係を明らかにした。

結果と考察

1. サンプルの属性

調査対象の属性を表1に示した。性別では男性39.3%、女性59.7%で女性の方がやや多く、結婚状況では未婚(32.8%)よりも既婚(65.0%)の方が上回っていた。年代別では20歳代から60歳代までがいずれも14%から20%までと平均して参加しており、職業別では会社員(25.8%)が一番多く、それに続き主婦(15.0%)、学生(13.1%)、公務員(11.4%)となっている。

また、この大会以前にSOのボランティア活動を経験したことのある人は少なく(7.9%)、ほと

んどの人(91.2%)は始めてSOに関わったことになる。居住地では、開催地である長野県内が多く(86.7%),ボランティア活動日数も大会期間である3日(31.1%)を中心に、4日間(25.8%),2日間(18.2%),5日間(10.9%)となっている。なお、家族、親族、友人・知人までを含め半数を超える人(52.6%)が身近に障害者がいると答えている。

表1 サンプルの属性

属性	n	%	属性	n	%
性別			最終学歴		
男性	183	39.3	中学校	21	4.5
男性	278	59.7	高校	162	34.8
回答なし	5	1.1	専門学校	56	12.0
年齢			短大・高専	63	13.5
10歳代	36	7.7	大学	138	29.6
20歳代	67	14.4	大学院	13	2.8
30歳代	88	18.9	その他	4	0.9
40歳代	77	16.5	回答なし	9	1.9
50歳代	91	19.5	身近な障害者		
60歳代	81	17.4	家族	62	13.3
70歳代以上	15	3.2	親族	60	12.9
回答なし	11	2.4	友人・知人	123	26.4
婚姻状況			知らない人だがよく見か	36	7.7
未婚	153	32.8	たまに見かける	69	14.8
既婚	303	65.0	いない	109	23.4
回答なし	10	2.1	回答なし	7	1.5
小遣い(月額)			SOプログラム参加経験		
5千円未満	35	7.5	参加したことはない	425	91.2
5千-1万円	69	14.8	参加したことがある	37	7.9
1万-2万円	78	16.7	回答なし	4	0.9
2万-3万円	98	21.0	住所		
3万-4万円	81	17.4	県内	404	86.7
4万円以上	89	19.1	県外	57	12.2
回答なし	16	3.4	回答なし	5	1.1
職業			大会活動日数		
会社員	120	25.8	1	41	8.8
団体職員	21	4.5	2	85	18.2
公務員	53	11.4	3	145	31.1
自営業	44	9.4	4	120	25.8
主婦	70	15.0	5	51	10.9
学生	61	13.1	6	8	1.7
パート・アルバイト	42	9.0	7	5	1.1
無職	44	9.4	8	1	0.2
その他	5	1.1	10	4	0.9
回答なし	6	1.3	12	1	0.2
			15	2	0.4
			30	2	0.4
			回答なし	1	0.2

2. ボランティア活動の動機

参加動機に関する30項目の調査について因子分析を行い、ボランティア活動に参加する動機因子で固有値1以上のものを抽出した。ここでは、先行研究であるスポーツ組織を支えるボランティアの動機（松岡，小笠原，2002）が示す「8要素」を視野に入れ、因子数8つで分析を施した。8因子での累積寄与率は60.869%となった（表2）。

表2 ボランティア参加動機の因子分析結果

参加動機因子	累積寄与率	因子負荷量
【社交】	10.214	
新しい知識や経験を得たい		0.809
社会的な視野を広げたい		0.746
多くの人と出会いたい		0.740
参加者（選手）と交流できる		0.583
自分自身が成長したい		0.567
【個人的興味】	18.307	
余暇時間を有効に活用したい		0.657
気分転換になる		0.561
ボランティアの必要性を他の人に理解してもらいたい		0.548
活動を通して自分を表現できる		0.536
地域の活性化に関心がある		0.525
【スポーツ】	26.222	
スポーツに関心がある		0.855
スポーツ活動を支援したい		0.692
イベント（プログラム）に興味がある		0.640
【社会的奉仕】	34.068	
活動を通して社会の役に立ちたい		0.824
他の人の役に立ちたい		0.793
イベント（プログラム）運営に役立ちたい		0.495
ボランティア活動に興味がある		0.468
【報酬】	41.657	
記念品などがもらえる		0.788
他の人から認められたい		0.687
ストレス解消になる		0.593
【選手支援】	49.070	
参加者（アスリート）に関心がある		0.745
障害者に関心がある		0.653
参加者（アスリート）の活動を支援したい		0.494
イベントを盛り上げたい		0.379
【組織的義務】	56.061	
SOから依頼された		0.805
知人や友人に強く頼まれた		0.783
会社や学校、地域団体で参加することになった		0.770
【学習・経験】	60.869	
何らかの報酬を得たい		0.597
身につく技術や技能が得られる		0.571
自分の知識や経験を生かしたい		0.517

第1因子は、「新しい知識や経験を得たい」「社会的な視野を広げたい」「多くの人と出会いたい」「参加者（選手）と交流できる」など他者との出会いや社会との関係を構築することを期待する因

子と考えられる。これは先行研究(松尾ら2002)での「社交」と一致する。同様に、第2, 第3, 第7, 第8因子の内容も松岡ら(2002)の分類した動機に合致しているため、本稿ではその因子名を引用した。次の「余暇時間を有効に活用したい」「気分転換になる」などは実益に関係ない理由であり、単なる「個人的興味」と考えることができ、第3因子は、「スポーツに関心がある」「スポーツ活動を支援したい」「イベントに興味(プログラム)がある」というようにスポーツ活動に対して興味があることが明らかであるため「スポーツ」とすることが妥当だと判断できる。第4因子は、「活動を通して社会の役に立ちたい」「他の人の役に立ちたい」「イベント(プログラム)運営に役立ちたい」と周りへの貢献を表すものであり「社会的奉仕」と命名した。第5因子は、「記念品などがもらえる」「他の人から認められたい」などボランティアに参加することに対して見返りを求めるものであることから「報酬」とした。続く第6因子では、「参加者(アスリート)に関心がある」「障害者に関心がある」「参加者(アスリート)の活動を支援したい」と参加しているアスリートに対する支援に興味があることを示していることから「選手支援」と考えられる。第7因子では、「SOから依頼された」「知人や友人に強く頼まれた」「会社や学校、地域団体に参加することになった」など関わっている組織に対する義務感からボランティア活動に参加したものであるため、先行研究の「組織的義務」を適用した。最後の第8因子は、「身につく技術や技能が得られる」「自分の知識や経験を生かしたい」と知識の獲得や自己の経験に関連している内容であることから松岡ら(2002)の「学習・経験」が適当であるとした。

これらの抽出結果から、障害者のスポーツ活動を支えるボランティアは様々な参加動機を持っていることが明らかとなったが、先行研究(松岡, 小笠原, 2002)(松本, 1999)においても類似の内容が示されておりここでの結果は妥当なものだと確認できる。

3. ボランティア活動に対する満足度

ボランティア活動に参加したことへの満足度に関する項目を表3に示す。9つの満足度に関する調査項目で固有値1以上の因子の分析を行ったところ2つの因子が抽出された。これらの累積寄与率は60.660%であった。一つ目の因子では「必要情報の提供」「大会運営」「事前説明・講習会」などであり大会運営に対する自己の評価であることからこれを「運営への評価」とした。二つ目の因子では、「参加者との交流」「選手との交流」「ボランティアとの交流」と他者とのコミュニケーションに関する内容であることからこれを「対人的評価」とした。(表3)

表3 ボランティア満足度の因子分析結果

ボランティア満足度因子	累積寄与率	因子負荷量
【運営への評価】	42.525	
必要情報の提供		0.828
大会運営		0.790
事前説明・講習会		0.774
実行委員会の対応や態度		0.754
支給品		0.559
【対人的評価】	60.660	
参加者との交流		0.841
選手との交流		0.796
ボランティアとの交流		0.758
自分自身の活動内容		0.663

次に、ボランティア活動に参加したことへの満足度と参加動機の間を明らかにするための分析を行った。因子分析によって抽出された2つの満足度因子「運営への評価」と「対人的評価」を従属変数とし、参加動機で抽出した「社交」「個人的興味」「スポーツ」「社会的奉仕」「報酬」「選手支援」「組織的義務」「学習・経験」の8つの動機因子を独立変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った。「運営への評価」と参加動機因子の分析では、「個人的興味」($\beta=0.146$)と「選手支援」($\beta=0.099$)の2因子において関係がみられ、実益に関係なくボランティアに参加した人や、障害者や参加者に関心があるという動機で参加した人たちの大会運営に対する評価に影響を与えたと考えられる。(表4)

一方の、「対人的評価」と参加動機因子の関係では、「個人的興味」($\beta=0.187$)と「社交」($\beta=0.155$)の2つの動機因子の値が高く、人との出会いや協力といったことに興味を持って参加した人たちは対人コミュニケーションの部分での満足度が高いと考えられる。(表5)

表4 ボランティア満足度と参加動機の重回帰分析結果
(運営への評価を従属変数とした場合)

参加動機因子	β	t
個人的興味	0.146***	2.968
選手支援	0.099*	1.998

$R^2=0.038$ * $p<.05$ *** $p<.001$

表5 ボランティア満足度と参加動機の重回帰分析結果
(対人的評価を従属変数とした場合)

参加動機因子	β	t
個人的興味	0.187***	3.768
社交	0.155**	3.120

$R^2=0.075$ ** $p<.005$ *** $p<.001$

4. ボランティア活動をしたことによる燃え尽き度

続いて今大会期間中のボランティアに参加したことによる「燃え尽き度」について設定された17項目について因子分析を行った。燃え尽きに関する因子は3つ抽出され、これらの累積寄与率は54.901%であった。1つ目は、「今の活動に心から喜びを感じるがあった」「活動が

楽しくて知らないうちに時間が過ぎることがあった」「我を忘れるほど活動に熱中した」など、ボランティア活動に対して燃えつきではなく肯定的な評価をしているものであったため、これらを「燃え尽きなし」とした。2つ目は「一日の活動を終わるとやっと終わったと感じた」「こんな活動もうやめた」「自分の活動がつまらなく思えて仕方がなかった」等のボランティア活動そのものへの否定を示していることから「興味・関心の喪失」とした。最後は「一緒に活動している人の顔を見るのもいやになることがあった」「一緒に活動している人と何も話したくなくなるがあった」「こまごまと心配りすることが面倒に感じた」など対人的なことに対する否定を表わしていることから「交流・協力の否定」とした。(表6)

次に、ボランティア活動に参加したことへの燃え尽き度と参加動機の間を分析した。因子分析によって抽出された3つの燃え尽き度因子「燃え尽きなし」と「興味・関心の喪失」および「交流・

協力の否定」を従属変数とし、参加動機で抽出した「社交」「個人的興味」「スポーツ」「社会的奉仕」「報酬」「選手支援」「組織的義務」「学習・経験」の8つの因子を独立変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った。燃え尽きなしでは、「社会的奉仕」($\beta=0.204$)、「社交」($\beta=0.132$)、「個人的興味」($\beta=0.126$)、「選手支援」($\beta=0.145$)の値が高く、実益に関係なく他者と出会いたい、人の役に立ちたいという動機でボランティア活動に参加してきた人たちは燃え尽きを感じない傾向であることがうかがえた。(表7)「興味・関心の喪失」因子では「組織的義務」($\beta=-0.175$)因子との関係が高く、誰かに依頼されて参加した人たちのボランティア活動に対する関心は弱く作用していることがわかる。(表8)最後の「交流・協力の否定」因子での重回帰分析では、「選手支援」($\beta=0.168$)の他、「組織的義務」($\beta=-0.169$)と「報酬」(-0.166)因子の値が高くなっている。自らの意思ではなく他者から依頼されて参加した場合や、何らかの報酬を期待して活動に参加した人たちのボランティア相互の交流や協力といったことに対して影響を与えているとことを示している。(表9)

表6 ボランティア燃え尽き度の因子分析結果

ボランティア燃え尽き度の因子	累積寄与率	因子負荷量
【燃え尽きなし】	22.454	
今の活動に、心から喜びを感じるがあった		0.830
活動が楽しくて、知らない内に時間が過ぎることがあった		0.826
我を忘れるほど活動に熱中した		0.739
この活動は自分の性分に会っていると感じた		0.727
活動を終えて今日は気持ちがよい日だったと思った		0.689
我ながら活動をうまくやり終えたと思うことがあった		0.679
【興味・関心の喪失】	42.023	
一日の活動を終わると「やっと終わった」と感じた		0.809
「こんな活動もうやめた」と思った		0.670
身体も気持ちも疲れ果てたと思うことがあった		0.667
自分の活動がつまらなく思えて仕方ないことがあった		0.648
活動前、家から出ることが嫌で家にいたいと思った		0.629
活動のために心にゆとりがなくなったと感じることがあった		0.562
今の活動は、私にとって意味のないと思うことがあった		0.544
【交流・協力の否定】	54.901	
一緒に活動している人の顔を見るのも嫌になることがあった		0.800
一緒に活動している人と何も話したくなくなるがあった		0.695
こまごまと心配りをすることが面倒に感じた		0.599
活動の結果はどうでもよいと思うことがあった		0.435

表7 ボランティア燃え尽き度と参加動機の重回帰分析結果
(燃え尽きなしを従属変数とした場合)

参加動機因子	β	t
社会的奉仕	0.204***	3.924
社交	0.132*	2.564
個人的興味	0.126*	2.734
選手支援	0.145*	2.726

$R^2=.205$ * $p<.05$ *** $p<.001$

表8 ボランティア燃え尽き度と参加動機の重回帰分析結果
(興味・関心の喪失を従属変数とした場合)

参加動機因子	β	t
組織的義務	-0.175***	3.924
選手支援	0.155**	2.564
学習・経験	-0.171***	2.734
社会的奉仕	0.137*	2.726

$R^2=.122$ * $p<.05$ ** $p<.005$ *** $p<.001$

表9 ボランティア燃え尽き度と参加動機の重回帰分析結果
(交流・協力の否定を従属変数とした場合)

参加動機因子	β	t
組織的義務	-0.169***	-3.591
選手支援	0.168***	3.680
報酬	-0.166***	-3.583

$R^2=.107$ *** $p<.001$

まとめ

本研究では、知的障害者のスポーツ活動を支援するボランティアを対象として、その参加動機、活動への満足度および燃え尽き度の因子分析を行なった。その上で、満足度と参加動機、燃え尽き度を参加動機との関係を、ステップワイズ法による重回帰分析で明らかにした。主な結果は以下の通りである。

- (1) 障害者スポーツを支援するボランティアに参加する動機因子を、「社交」「個人的興味」「スポーツ」「社会的奉仕」「報酬」「選手支援」「組織的義務」「学習・経験」と確認した。
- (2) ボランティア活動に参加しての満足度を規定する因子として、「運営への評価」「対人的評価」の2つが抽出できた。
- (3) ボランティア活動に対しての燃え尽き度を構成するものとして、「燃え尽きなし」「興味・関心の喪失」「交流・協力の否定」という3つの因子を確認した。
- (4) 参加動機と活動満足度の関係では、実益に関係なく人との出会いや協力といったことに興味を持って参加した人たちは対人コミュニケーションの部分での満足度が高いことが確認された。
- (5) 活動燃え尽き度に関係あるのは、自らの意思ではなく他者から依頼されて参加した場合や何らかの報酬を期待して活動に参加した人たちであった。

以上の結果から、ボランティア活動への参加動機が満足度に一定の影響を与えていることが明らかとなった。このことは、ボランティア活動を始めるきっかけともなる広報活動や、教育プログラム、活動内容といった受け入れ態勢などに関するマネジメントの必要性を示していると考えられる。

ボランティアの参加意欲や満足因子は、活動とともに変化していくとされ(松岡, 小笠原, 2002)、一方で活動の継続、及び終了を規定する要因も本研究で取り上げた「満足度」「燃え尽き度」だけではないと思われる。引き続き、他の要因も含め継続的に検討を行なっていく必要があると考える。

文献

- 松本耕二. スポーツボランティアの類型化に関する研究: 障害者スポーツイベントのボランティアに着目して. 山口県立大学社会福祉学部紀要5.11-19. 1999.
- 松岡宏高, 小笠原悦子. 非営利スポーツ組織を支えるボランティアの動機. 体育の科学52,277-284. 2002.
- 松尾哲也. スポーツ・ボランティアとその専門性. 体育の科学52,270-276. 2002.
- 田尾雅夫. ボランティア組織の経営管理. 東京, 有斐閣. p 44, p 45-59. 1999.
- 田尾雅夫. ボランティアを支える思想. 東京, アルヒーフ. p -18-19. 2001.
- 和田敏明. 地域福祉の担い手. 東京, ぎょうせい. p 10-11. 2002.
- 山内直人編. 日本の寄付とボランティア2004. 大阪大学大学院国際公共政策研究科NPO研究情報センター. p 4-7, p 23. 2004.